

陳舜臣さんと 神戸を歩こう

Part 4



陳舜臣さんを語る会

16 「内海岸通(のちの乙仲通)」及び「旧居留地十五番館」

内海岸通 おつなか
(のちの乙仲通)

まず、『残系の曲上』
(朝日文艺文庫)カバー裏のキャッチコピーです。

第二次大戦前の神戸。

華僑商館の跡取りとして迎えられた修平。実の父親は中国人という真相に驚く間もなく、未知の生活はスタートした。自分は日本人なのか、中国人なのか？ 自らの根を探しに、中国大陸へ旅立った彼がみたものは……。一人の少年の成長と激動の世界を描く長編小説。

続いて本文を引用します。

栄町と海岸通の境界は、内海岸と呼ばれる通りであった。海岸本通ほどひろくはないが、この通りの両がわには、海産物問屋が五、六十軒ずらりとならんでいる。彼らは北は北海道から南は九州まで、全国各地の海産物を集荷してくる。それを華僑商館の人たちが仕入れて、中国や東南アジア各地へ積み出すわけである。

(p.74)

このほか、随筆『道半ば』

この通りは、かつて内海岸通と呼ばれるほど海に近く、海運貨物取扱業者が古くから軒を並べてはぎわっていました。昭和14年、政府は戦時体制に備え、これらの業者を乙種海運と親しまれ、その活況から「乙仲さん」と親しまれ、その活況から通りの名前まで「乙仲通」と呼ばれるようになったのです。平成20年4月、市民の声も「乙仲通」にまとり、神戸市から道路の愛称に認定されました。

平成20年12月1日 みなと元町タウン協議会

などにも「内海岸通」が出てきます。内海岸通が乙仲通と呼ばれるようになったのはもつと後のことです。詳しくは右の説明板をご覧ください。



右の標識は、乙仲通の東端、鯉川筋(メリケンロード)を隔てて兵庫農農業会館が見えるあたりです。

旧居留地十五番館

陳舜臣さんは、『神戸ものがたり』(二〇一七のじぎく文庫版)「南北の道」で、次のように記述しています。

慶応三年十二月に設けられた約四万坪の居留地は、明治三十二年七月に回収された。居留地時代の建物は、その後改築されたり、戦災で焼けたりして、現存するものは僅か一棟にすぎない。いまの株式会社野沢がそれである。十五番館と呼ばれていた煉瓦造り二階建てのこの商館は、明治六年ごろに建てられた。少年時代、筆者は海岸通り五丁目に住んでいた。よく自転車にのって、海岸通りから元居留地へ行ったものである。そのころは車もすくなく、自転車のりは快適な運動であった。

筆者がよく行ったところは、居留地が廃止されてすでに四十年近くたっているのに、妙な言い方だが、「日本化」されていた。それでも、ふりい建物はやはり居留地時代の名残りをとどめて、ほかの地域にない特有の雰囲気をつくっていた。遠い国々とながっているような気がして、筆者はなんとなくその雰囲気に浸るのが好きだった。

(p.66-67)



また、『白い泥』で陳さんは、ジャクソン商会を、文中、次のように描写しています。左の画像は、今に残る十五番館ですが、雰囲気は感じられるのでは。

ジャクソン商会は、元居留地の一等地に小さいながらも二階建てという、いまにすればぜいたくな建物である。以前、近辺にはおなじような商館の建物がならんでいたが、いまではほとんど高層ビルの街と化し、おかしな面影をとどめているのは、ジャクソン商会だけとなった。頑固な面魂で、谷間にふんぞりかえっているといった恰好である。(徳間文庫版 p.92)

17 小学生の陳舜臣さんを診察した佐野実病院長

自転車でも買ってあげたら
どうですか。(佐野病院長)

『道半ば』から抜粋・引用
します。

北長狭にいたのは三年ほどであったと思う。小学校(※神戸校)の二年から四年にかけての時代である。

北長狭の借家は鯉川筋の裏にあたる。表通りには佐野病院があり、私は父に連れられてよく病院通いをした。とくにどこが悪いというのではないが、子供らしい活発さがないことを父は心配したようだ。

——自転車でも買ってあげたらどうですか。

これが佐野先生の診断であった。

おかげで子供用の自転車を買ってもらい、ほうぼうへ遠出した。元気なすがたをみせるのが親孝行だと思つて、だいぶ無理をしたのである。

北長狭にいたころは、無理にしても元気に遊ぶふりをしなければならなかった。佐野病院の院長の子供たちとはよく遊んだ。

(※は加筆)

(p.33-34)

左は、「佐野病院125周年記念号」(二〇一三年四月号)掲載、当時の病院と佐野実二代病院長の写真です。



1935年の佐野病院(現在の神戸市中央区鯉川筋)



佐野実二代病院長
(任:1924-70)

右にあげた「佐野病院125周年記念号」によると、一九四五年、二代病院長の時代、空襲で病院は全焼します。そんななかでの再出発でした。

最も古い住宅地図(昭和31年版)

地図の一番下が現在のJR元町駅

1945年の空襲で佐野病院は全焼しますが、この境界、被災地が多くあったと思われます。10年経っていますが、そんな状況も引きずる昭和31年版です。



18 神戸市立第一神港商業学校、及び横溝正史生誕地碑

昭和十一年から五年間通った
神戸市立第一神港商業学校

ここに、陳作品のなかから、昭和十三年の神戸大水害の記述箇所を抜き出したのは、当時、陳舜臣さんが通っていた学校について知ってもらいたいです。

まず、『道半ば』から引用します。

昭和十一年に第一神港（※神戸市立第一神港商業学校）に入学し、十二年には盧溝橋事変が勃発した。そして十三年には神戸に大水害がおこった。（p.88 ※は加筆）

次は、『青雲の軸』（集英社文庫）から抜粋・引用します。傍線は加筆。

昭和十三年は、七月にはいつてから、連日雨が降りつづいた。三日、四日は一日じゆう降りつ放しで、五日の朝はまるで総決算のように、やけに降りつづいた。

雨天は雲が太陽を遮るので暗いのである。だが七月五日の朝の暗さは、すきまのない雨のためにその曇った空さえ見えにくくなったためである。えげやま山下山の学校では、折しも

学期末考査の最中であつた。英語の試験であつたが、給仕が紙片を持って教室にはいり、監督の先生に手渡した。

——即時、試験を中止し、雨天体操場に集合せよ！

監督の教師がその指示を読み終わると、全クラスの生徒が歓声をあげた。

「うわーい、ええセエやー！」

雨天体操場へ行っても、集まった全校生徒がはしゃいでいた。教頭が壇上にあがって、「なにを騒いどるか！」と、どなった。

「おまえたちは、街がどうなっているか知つとるのか？」

「神戸ぜんたいが山津波にやられてゐるのだ」

教頭は帰途を遮断された地域を説明し、そこから通っている生徒は残留せよと命じた。海岸通のほうは情況不明だが、あるいは行き着けるかもしれない。そんな心細いことであつた。

俊仁は行くことにした。

学校のすぐ下の市電上沢通は、すでに濁流逆巻いて、通行不能となつていた。そこで、会下山の裾をぐるりとまわり、湊川公園の北、平野近くから迂回して、やっと市電の山手線に出た。（p.100-103）



当時、陳舜臣さんが通っていた神戸市立第一神港商業学校の所在地は、現在の地番でいうと、神戸市兵庫区会下山町3-1-1です。

右の写真は、今はない旧校舎。いまここには、二〇一六年に開校した神戸市立神港橋高等学校の新しい校舎が建っています。

アクセスは、神戸市営地下鉄上沢駅より徒歩3分、神戸高速鉄道大開駅より徒歩7分、JR兵庫駅より徒歩15分です。

「横溝正史生誕の地」碑 (東川崎町 揮毫:陳舜臣)

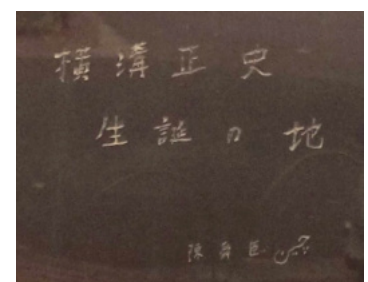
碑はJR神戸駅を南へ出て南下、神戸新聞社前の道路を右手に進み6、7分、湊小学校前交差点を過ぎた辺りの道路脇の狭い土地に立っている。

立方体の台の上は、二つのつながったメビウスの輪で、複雑に絡み合った難事件が、名探偵により、見事に解決さ



れていく「横溝文学」を象徴しているという。

除幕式は2004年というから、陳さんは、不自由な手で書いたわけだが、なかなか味のあるいい字である。



19 陳さん屈辱の出来事 植木市と指紋押捺

小学生のころ、祖父と行った
植木市のできごと

『青雲の軸』（集英社文庫）か
ら抜粋・引用。傍線は加筆。

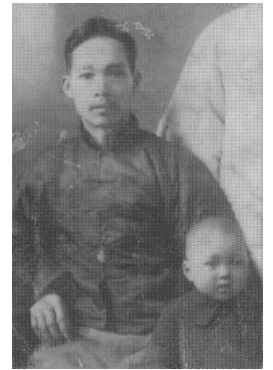
神戸の元町四丁目の通りの山側、五丁目に近いところに、おかしちよつとした空地があった。俊仁がまだ小学生のころは、定期的にそこで植木市がひらかれていたようだ。俊仁の祖父は植木いじりが好きであった。祖父は俊仁を連れて、その植木市の前を通りかかり、ついでのことに、のぞいてみる気になった。

そのときの祖父のいでたちは裏に狐の毛がついている、ゆつたりとした中国服であった。ずいぶん高価なものらしいが、気に入りの服とみえて俊仁の記憶にある祖父は、いつもそれを着ていた。

ところが、おこうにいた植木屋が、大きな声でどなりつけたのである。

「こらあ！ ここはチャンコロの来るとこやないぞ。なんぼカネ出したかて、わいら、チャンコロには売らへんのやから。早よ去にやがれ！」

だが祖父は植木屋の声など、まるできこえなかったように、そのままつつ立って、植木をじつ



祖父と舜臣
『Who is 陳舜臣?』

と見つめていた。

俊仁はおそろしさのあまり、ぶるぶる顫えながら、祖父の袖をひっぱって、

「早よ行こ、お祖父ちゃん！」と、半泣きの声を出した。

いつもは孫に甘い祖父が、そのときばかりは、きびしい声で、きっぱりと言った。

「ちゃんと植木を見てから、それから行くんだ」

植木屋は俊仁の祖父のそばまで寄り、「やい、ふざけとんのか！ おまえらに見られたら、植木が腐ってしまうやんかい。早よ去なんと、どつくぞ！」と拳をふりあげた。

俊仁の祖父は、やっと孫の手をとって、「さあ、帰ろう」と、ゆっくりと言った。

俊仁は祖父の手のひらが、燃えるように熱かったことが、いつまでも忘れられなかった。

（これを一生忘れてはいけないうで）祖父の手のひらの熱は、俊仁にそう教えているかのようだった。

(p.38-40)

陳舜臣さん屈辱の行事、
三年に一度の指紋押捺

『失われた背景』（中公文庫版）から抜粋・引用します。

東方文明研究所オフィスの家主が殺され、同所員程紀銘に容疑がかりそうになる場面です。

日本人の場合、前科があるとか、なにか警察で調書をとられたとか、そんな特殊なケースを除いて指紋をとられるようなことはない。

ところが、外国人は、外交関係者を除いて、一人のこらず指紋をとられている。外国人登録で、それが義務づけられているのだ。だから、もし程紀銘の指紋が現場から検出されたとすれば、すぐに外人登録の指紋と照合されるわけである。（p.130）

外国人登録は陳舜臣さんご自身にとっても、三年に一度やって来る、屈辱の行事だったのです。早川書房版『割れる』「あとがき」から引用します。傍線は加筆。

この秋はさわやかで、私のからだの調子もよかった。故障といえば、ただ指のさきがすこし荒れたぐらいである。

この作品の構想を練りはじめたころ、外人登録の切りかえがあった。われわれ外国人は、三年に一度、登録を更新しなければならぬ。そのときに、新しい写真と指紋をとられる。神戸の生田区役所では、指紋用インキを拭くために、ベンジンを浸した脱脂綿をくれた。私は皮膚が弱いので、ベンジンに負けて指さきが荒れたというわけだ。

■指紋押捺は、特別永住者については一九九三年から免除。



陳さんが「外人登録」の切りかえに訪れていた頃の生田区役所。現在は兵庫県神戸総合庁舎。

20 追谷(おいたに)墓地

『残系の曲』に描かれた追谷墓地

追谷墓地は、JR元町駅の東口を出て、鯉川筋を北上、海外移住と文化の交流センターの裏手を登ったところだ。

『残系の曲 上』(朝日文芸文庫)から二ヶ所、抜粋・引用します。

神戸の追谷墓地参道では、並木の桜の枝に蕾がふくらみかけていた。

新しくできた再度山ドライブ・ウェイをすこしあがり、入口に『閻道深』と刻まれたトンネルの手前で、右へ折れたところからその参道ははじまる。(p.249)



墓地、登り口

在留中国人のために、神戸には『中華義荘』という専用の墓地がある。修平の父も、とうぜんその中国人墓地に葬られるはずなのだ。ところが、義母が猛烈に反対した。

彼女によれば、仇敵の家庭の墓のそば近くに埋葬されると、夫は

死んだあとでも争わねばならず、その魂がやすまらないという。

では、ふつうの日本の墓地にしようということになり、義母は石碑店に紹介された追谷墓地に墓を建てるつもりだった。北野町の家から車で行けば、五分もかからないのも魅力であつたらしい。

修平はいま秀琴の案内で、そこを見に行こうとしているのだった。追谷墓地には、ごくすくないが、中国人の墓もあつた。有名な亡命画家胡鉄梅(こてつばい)の墓もそこにある。(p.253-254)



追谷墓地十六区にある
胡鉄梅の墓 白い矢印

『走れ蝸牛』「家紋」にみる
陳家の墓

『走れ蝸牛』(二玄社)「家紋」より抜粋・引用します。

私の祖父は昭和七年に世を去った。もう一族は神戸にいるのだから、神戸に墓をつくることになったが、石工は家紋を彫らねば、「恰好がつかません」と主張した。「中国には家紋などはありません」と言うと、「では、なにか適当に彫っておきましょう」と、かなりいい加減なものだ。

石工が我が家の墓のために、みつくりつてくれた紋がマンジであつた。これならお寺の紋ではあるし、普遍性があると考えたのであろう。じつさに、「五つ割マンジ」とか、「ねじマンジ」といった家紋がある。私の父は、既成の日本の家紋を用いるのに抵抗があつたらしい。「養子になるわけじゃなし」という気分上の問題なのだ。日本にまだない家紋にこだわった。父の意見をきいた石工は、「じゃ、マンジを逆にしましょう。これはないはずですよ」と、知恵をいれた。

こうして、祖父の墓に逆マンジが彫られた。アドルフ・ヒトラーがドイツで政権を掌握したのは、私の祖父の死の翌年のことである。私の父もくだんの石工も、逆マンジがナチスのシルシであることを知らなかったのだ。孫の七五三の衣裳で家紋が、五十数年ぶりに我が家の問題となった。まさか逆マンジは使えない。我が家の庭に桐があるので桐にした。ま、家紋などはそんなふうにしてできたのだ。

左の画像は陳家のお墓。祖父、恭和氏が「三十一世祖」という文字は墓碑の裏面に確認。特に気になっていた「潁川(えいせん)」の文字及びマンジがはっきりわかる。「エエッ!」、これは、お寺の記号のマンジで、逆マンジではない。この部分だけ石材が新しい。作り変えたよう。

